

経営(継業)のツボ

理念



転期に立つ経営者の資質の鍛え方⁶⁸

和気満堂

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『早川浩士の常在学場』(簡井書房)、『介護人財創造塾』(簡井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

http://www.hayakawa-planning.com
ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

和気、堂に満つる

東日本大震災をはさんで、今年1月、5月、7月と立て続けに足を運ぶことができた宮城県のとある地で、週に一度の訪問入浴介護サービスを利用される方のご自宅へ同行させていただけるという機会を得ることができた。

訪問先は、築百年を越す旧家。高らかに家紋をかざした見事な屋根瓦の家構えから、この地域の名家であることが一目瞭然。蔵の中には累代の家系図があるという。座敷に入ると、「和気満堂」と記した扁額の書に目を奪われた。

「和気、堂に満つる」と読む。「和気」とは、のどかな陽気、穏やかな気候のこと。

「満堂」とは、堂の中に満ちること。また、堂の中の人がいっぱいに満ちて満場になること。

つまり、和やかな空気が場内に満ちる状態のことを言う。

和やかな、楽しい雰囲気、この部屋に満ち溢れることを願って掲げたのは、利用者であるこの家のご主人だという。

部屋一杯に満ちた和やかな雰囲気、めでたさを生み出すという

意味を込めて「満堂和気生喜嘉祥」の七文字で表すこともある。

いずれの言葉も、家庭のありさま(あるべき姿)を指し示していることに変わりはない。

地域のまとめ役として人の出入りが絶えなかったという家だったからこそ、「和気満堂」を大事にしていたのであろう。

無財の七施

仏教には、「無財の七施」の教えがある。

「和気、堂に満つる」を実現するためのヒントは、ここにある。

一 眼施

やさしい眼差しで人に接する。

「目は口ほどに物を言う」くらい、相手に気持ちや伝えられるような目配りはできているか。

二 和顔施

にこやかな顔で人に接する。

「悪い感情をあらわにして険しい表情をしない」よう、和気につとめることはできているか。

三 言辞施

やさしい言葉で接する。

「柔らかい言葉を出し、粗暴な言葉を使わない」ということができているか。

四 身施

自らの身体を使って人のため、社会のために奉仕する。

「傍の人を楽に、楽しくなるようにハタラク」ということができているか。

五 心施

思いやりの心を持つ。

「ありがたい言葉を、感謝の気持ちで心から伝える」ということができているか。

六 床座施

場所や席を譲り合う。

「どうぞの一言とともに分かち合い譲り合う」ということができているか。

七 房舎施

訪ねてくる人があれば、一宿一飯の施しを与え、労をねぎらう。

「おもてなし」ということができているか。

対人力の養い方や高め方を七つの視点から問いかけられていると理解すれば、介護の質を点検するうえからも学びは深くなる。

まずは、愛敬たつぶりの会釈を惜しまぬことから始めたい。

それには、笑顔をおくるといって贈り物を心がけることを忘れてはいけない。